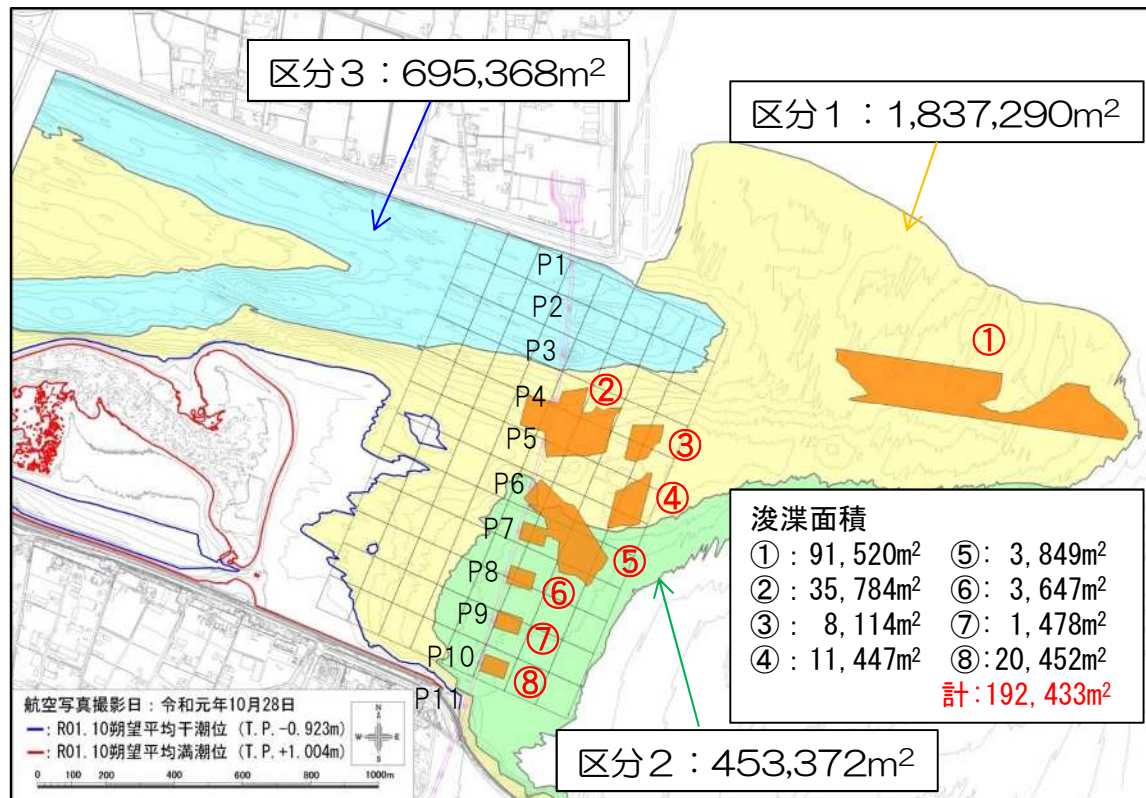


# ■ 浚渫の影響評価 ～浚渫範囲の確認と影響評価の流れ～



令和元年度渇水期の浚渫範囲は192,433m<sup>2</sup>であり、ハビタット区分1に対しては8.4%、区分2に対しては8.6%に相当している。これを踏まえて、指標種の生息可能範囲への影響を予測した。

## ■ 浚渫範囲とハビタット区分の面積



区分	ハビタット面積 m <sup>2</sup>	想定最大時	
		浚渫面積 m <sup>2</sup>	割合 %
区分1	1,837,290	153,799	8.4
区分2	453,372	39,173	8.6
区分3	695,368	0	0.0

これはあくまでも設定したハビタット区分に対するものであり、生物の生息範囲に対する浚渫範囲ではない。

底生動物の生息評価モデルを用いて生息可能範囲を予測し、その範囲に対して浚渫範囲がどの程度の影響になるか予測（定量評価）。

浚渫面積が被っている**区分1**、**区分2**の指標種について影響評価を行う。

区分	選択した指標種	生息評価モデル
区分1	3種：フジノハナガイ、バカガイ、ヒサシソコエビ科	地盤高のみ
区分2	2種：チヨノハナガイ、シノブハネエラスピオ	選好度モデル(地盤高&含泥率)